熊野宮の大絵馬

氏神さまへ初詣
わが街の神社の風景

特集

四季折々の神社の祭礼は、私たちが住む街の風物詩。その由緒は地域の歴史を物語っています。初詣に出かける前にどうぞ！

（神社の地図はP.10、11をご覧ください）

小平神明宮
鎮守の社に脈々と伝わる伝統祭事

上）善男善女の初詣
下）年越しの境内
左）宮司の宮崎和美さん

青梅街道沿いの鳥居をくぐると、100m余り続く参道。その両側に欅や榎の大木が並び、境内には創立50周年になる小平神明幼稚園があります。江戸時代、このあたりは「透げ水の里」といわれるほど水利に乏しい武蔵野の荒野でした。玉川上水とその分水が開削されて以降、小川村の開拓が始まり、移り住む人々の守護神として、寛文元年（1661）、阿豆佐味天神社（現在の瑞穂町）の摂社で岸村に鎮座していた神明社を勧請。これが神明宮の起源です。その時の神主、宮崎主馬から現在の宮司、宮崎和美さんは12代目にあたります。参道の入り口近くにある、大正年間に建立された小川村開拓碑に開拓の由来が刻まれています。

鎮座354年、古くから〝しんめいさま〟として崇敬されてきた神明宮には、今も四季折々の祭事が続いています。元日午前零時からの平安祭に始まり、元旦祭、どんど焼、節分追儺祭、八雲祭、夏越しの大祓式、例大祭、新嘗祭・初穂会、「お竈じめ」頒布式、冬至の星祭まつり、年越しの大祓式など。祭事を通して、先人の祈りの心が伝わってくるようです。

中でも最大のお祭りは4月に行われる八雲祭（27年は4月25・26日）。境内の東側にある末社、八雲神社のお祭りで、大正年間氏子中で病気が流行った時、疫病の退散を願い始まったもの。宵宮祭では暗闇の中、9基の万灯が青梅街道を練り歩きます。翌日は御神体をお乗せした大神輿が早朝から1日かけて、氏子区域14kmを巡ります。境内では市民団体等による露店が出て、多くの人々で賑わう郷土の祭りとなっています。

「境内を交代でお掃除してくださるボランティアの方々がいらしたり、地元の皆さんがこの神社を大切にしてくださいます。先代から受け継いだものは同じように守っていきたいものです」と宮司の宮崎さん。

◆小平市小川町1-2573
☎042（341）0407

熊野宮

一本榎、夫婦欅が見守る神社

その昔、荒漠とした原野であった現在の熊野宮がある地には、1本の榎の大樹がそびえ立っていました。往来する人々にとってはそれが目印で、一時の休息の場ともなり「武蔵野の一本榎」と呼ばれていました。小川村の開拓後、小川新田（現在の仲町、喜平町、学園東町、学園西町と上水本町の一部と上水新町）の開拓を行うのに先立ち、その守護神として、宝永元年（1704）この榎の大樹のもとに祠が建てられました。小川村同様、神主宮崎主馬が岸村に鎮座していた社を遷座したものです。今の宮司は9代目にあたる宮崎久嗣さんです。

一本榎は現在3代目となり、樹齢約百年になる孫木が一本榎神社として、境内奥の末社殿に祀られています。一方、社殿正面には寄り添うように、「夫婦欅」の巨樹が立っています。樹齢約300年、夫婦円満の象徴として親しまれています。大切なこれらご神木の管理が、どの神社でも大変そうですが、熊野宮でも専門家に依頼し、定期的に診てもらっているそうです。

例大祭は9月19日前後の土曜、日曜に行われ、旧小川新田区域を御神輿が勇壮な大太鼓、鈴木囃子とともに練り歩きます。元日の初詣は青梅街道から200mある参道が人の波で埋まるほどの賑わいです。

「早朝や仕事帰りに毎日お参りされる方々には頭が下がります。親子3代にわたり、お宮参り、七五三などで成長を見せていただくのはうれしいですね」と宮司さんは話します。

◆小平市仲町361
☎042（344）0638

上）宮司の宮崎久嗣さん
下）FC東京が奉納した絵馬

社殿奥の一本榎

南沢氷川神社

自然豊かな湧水の守護神

東久留米の落合川上流「沢頭（さがしら）」湧水群がある緑地の高台に社殿があります。清流と緑が織りなす、清々しい空気と静寂が別天地のようです。古来より湧水の守護神として奉斎されていたことを体感させてくれます。

創建年代は不詳ですが、平安時代の歌人、在原業平が東下りの折、この神社に立ち寄ったと古文書にあるとか。保存されている上棟札には、承応3年（1654）に南沢村、田無村、入間村などの総氏子中によって再建されたと記されています。現在の宮司、栗原健人さんは25代目。市内外の兼務神社が11社もあり、東久留米総鎮守の宮司として奉仕の日々です。

宮司の栗原健人さん

神社境内で4年に一度行われている「南沢獅子舞」（昨年開催）は江戸時代から伝わる伝統芸能。市の無形民俗文化財に指定され、10月中旬に2日間、五穀豊穣を感謝し、この神社と多聞寺と両方に奉納されます。獅子頭は「竜頭」でその舞は勇壮で激しく、世流布、神楽、万歳など近隣に見られない貴重な芸能です。

「神社を身近な存在として、地域の人々が集まる場にしたい」という栗原さんの思いから、寺子屋ならぬ「社子屋（やしろこや）」を計画中。日本文化に触れる勉強会や昔遊び、和の手仕事などを企画したい。また、緑豊かな自然の中で行う音楽祭や絵画展等、芸術の発表会の場になればとのこと。地域の人々と組んだ新しい試みが、近いうちに実行されそうです。

◆東久留米市南沢3－5－8
☎042（471）1542

田無神社

本殿は木彫建造物の最高峰

拝観日、拝殿を見る見学者

田無神社はもともと鎌倉時代、水に恵まれていた谷戸の宮山に鎮座し、尉殿大権現と呼ばれ、竜神様が祀られていました。江戸時代に青梅街道が整備されるとともに、寛文10年（1670）現在の田無神社の地に遷座。そして明治5年（1872）に田無神社と改称。遷宮当時の社殿（祠）は境内の野分初稲荷神社のところにあったといわれています。

本殿は安政5年（1858）に江戸神田の名工、嶋村俊表（しゅんぴょう）によって造られた総欅造りの社殿。都指定有形文化財として、通常は覆殿に鎮座のため、見ることはできませんが、運よく10月31日が特別拝観の日でした。1年のうちでも東京文化財ウィークに合わせて、酉の市開催時のみの拝観日。拝殿で神職の方の説明を聞き、神妙な心持で本殿に入ると、迫り来るような、あまりに見事な彫刻装飾に目を奪われました。入母屋造り、唐破風、千鳥破風をあしらい、周囲には古代中国の二十四考説話に基づいた人物や動物の彫刻。柱や欄干、扉、階段に至るまで、大胆かつ繊細な彫り物で埋め尽くされています。俊表の卓越した、技量を今に物語る代表作、江戸期の日本文化の結晶を拝観できた貴重な機会でした。

例大祭の神輿巡行

10月の第2日曜とその前日が例大祭。昔、慈雨を乞うために始まったというお祭り。本宮では「本社神輿」が田無の町を練り歩き、境内ではさまざまな奉納芸能が催されます。「伝統を守るため、ならわしやしきたりをより丁寧に行っていきたい」という宮司の賀陽智之さんは29歳。

11月には七五三に合わせ、子どもが喜ぶ「子供元気の日」を開催。「開かれた神社」へ期待が寄せられます。

◆西東京市田無町3-7-4
☎042（461）4442

日枝神社　水天宮

戌の日、毎月5日の縁日の賑わい

上）朱色が鮮やかな日枝神社
下）安産祈願の水天宮

清瀬駅から徒歩12分、志木街道沿いにある朱色の社殿が鮮やかな日枝神社、それと並んで鎮座する水天宮。威風堂々と2つの鳥居が並び、清瀬十景の一つです。日枝神社は天正7年（1579）、中島筑後守信尚が社殿を造営したと伝えられています。また、日本武尊が東征の際、境内のヒイラギの根元で一休みされ、「清キ土ナリ」と言われたことから、この村が清土と呼ばれるようになり、それが転じて「清戸」という地名が生まれたそうです。

水天宮は安産守護の神様として知られ、特に戌の日には近郊からも安産祈願の参拝者が訪れます。それが日曜、大安と重なると集中するそう。毎月5日には縁日が開かれ、露店が出で賑わいます。

「清戸の獅子舞」として知られる獅子祭は、7月15日前後の日曜日に行われます。北条氏輝が所沢市字城に城郭を築き、守護神として奉斎されたのが始まり。厄除け、五穀豊穣のおまつりとして、受け継がれてきました。練り行列から始まり、社前で勇壮な獅子たちの舞が繰り広げられます。

「神社を人々が集まる場所にしたいですね。昔から続いていることは、そ

れなりの理由があることですからできるだけ残していきたい。お参りしてよかったという方々の笑顔に接する時がうれしいですね」と宮司の星野誠さん。

初詣は両社殿の参道に人の波が続きます。3が日を過ぎても、厄除け祈祷の参拝者が節分まで続くそうです。

◆清瀬市清戸2丁目616
☎042（493）5211

八坂神社
天王様のお祭りが盛大に

府中街道沿いにある鳥居をくぐると、広々とした境内の奥にどっしりと構えた社殿があります。「武蔵野牛頭天王」と呼ばれ、疫病を鎮めることで知られる八坂神社。同じく牛頭天王を祀る京都の祇園社に倣って、明治2年に「八坂神社」と改称されました。創建年代は不詳ですが、市内野口町の旧別当寺であった正福寺とほぼ同時期に創建されたと伝えられています。江戸時代中期に起きた正福寺の火災のため、記録が焼失してしまい実際の起源ははっきりとしませんが、弘安元年（1278）前後から応永14年（1407）前後の頃といわれます。江戸時代までは野口の天王様と称されて、賑わいをみせていたそうです。

このように八坂神社はもともと正福寺を守護するために建てられ、府中街道沿いに社殿が遷されたものです。現在も正福寺には八坂神社の参集殿とお仮社があります。

7月15日に近い土・日曜に行われる例大祭は、宵宮で正福寺にある御神輿が八坂神社へ。本祭では八坂神社から正福寺へ、大太鼓を先頭に、御神輿、山車のお囃子が連なり、府中街道、廻田街道を巡行します。人出で道路がいっぱいになるほどの賑わい。昔から続く八坂神社の伝統行事です。例大祭と新年には額殿内に保管されている「大獅子頭」がガラス越しに公開されます。江戸時代、疫病が流行るとこの獅子頭を被って村内を巡ったそうです。

「初詣は元日の午後がピークで、八坂小学校のあたりまで列ができます。その後は厄除け祈願や会社等の集団祈願が1月半ば頃まで続きますね」と宮司の野口好久さん。

◆東村山市栄町3－35－1
☎042（391）0988

氷川神社
例大祭は秋の盆踊りで賑わう
東村山本務社

東村山市秋津町の静かな住宅街の中に佇むお社。須佐之男命（すさのおのみこと）を祭神とする秋津町の氏神様として親しまれています。

縁起は古く、秋津村の真言宗竜泉寺の境内社として弘仁9年（818）頃に、村の鎮守として崇敬されていたといいます。明治6年に村社に列格され、現在の社殿は昭和59年に再建されたもの。周りに高い建物がないせいか、青空にくっきりと浮かぶように建つ社殿は、とても清々しく見えます。大晦日の夜はお囃子が奉納され、11時頃から参拝者が多くなり、午前2時半頃まで人出が続くとか。元旦祭は5代目宮司の武内建市さんによって祝詞が上げられます。その後1月15日頃まで、建設関係会社の安全祈祷が多いそうです。

10月第1日曜に開催される例大祭は山車が秋津町内を練り歩きます。朝、氷川神社を出発し、戻って来るのが午後4時頃。午後6時からは境内で輪踊り（盆踊り）が始まります。秋に開かれる盆踊りも珍しく、夜店もいろいろと出ますが、今秋は残念なことに台風の接近で、一部が中止に。毎年、秋津町祭ばやし保存会によるお囃子が奉納され、笛や太鼓の音で秋の夜が大変賑わいます。

◆東村山市秋津町4丁目13－1
☎042（391）2347